



寒山拾得



寒山拾得緣起

森鷗外

藍岩堂





寒山拾得・寒山拾得緣起



藍岩堂



寒山拾得緣起

つれづれぐさ

徒然草に最初の仏はどうして出来たかと問われて困ったというような話があった。子供に物を問われて困ることはたびたびである。中にも宗教上のことには、答に窮することが多い。しかしそれを拒んで答えずにしまうのは、ほとんどそれはうそ嘘だということと同じようになる。近ごろ帰一協会などでは、それを子供のために悪いと言って気づかっている。

しょしょ

寒山詩が所々で活字本にして出されるので、私のうちの子供がその広告を読んで買ってもらいたいと言った。

「それは漢字ばかりで書いた本で、お前にはまだ読めない」と言うと、重ねて「どんなことが書いてあります」と問う。多分広告に、修養のために読むべき書だというようなことが書いてあったので、子供が熱心に内容を知りたく思ったのであろう。

私はとりあえずこんなことを言った。床の間にさきごろかけてあった画をおぼえているだろうから。唐子のような人が二人で笑っていた。あれが寒山と拾得とをかいたものである。寒山詩はその寒山の作った詩なのだ。詩はなかなかむずかしいと言った。

子供は少し見当がついたらしい様子で、「詩はむずかしくてわからないかもしれませんが、その寒山という人だの、それと一しょにいる拾得という人だのは、どんな人でございます」と言った。私はやむことを得ないで、寒山拾得の話をした。

私はちょうどそのとき、何か一つ話を書いてもらいたいと頼まれていたので、子供にした話を、ほとんどそのまま書いた。いつもと違って、一冊の参考書をも見ずに書いたのである。

しょし

この「寒山拾得」という話は、まだ書肆の手にわたしはせぬが、多分新小説に出ることになるだろう。

子供はこの話には満足しなかった。大人の読者はおそらくは一層満足しないだろう。子供には、話したあとでいろいろのことを問われて、私はまたやむことを得ずに、いろいろなことを答えたが、それをことごとく書くことは出来ない。最も窮したのは、寒山が文殊で拾得は普賢だと言ったために、文殊だの普賢だののことを問われ、それをどうかこうか答えるとまたその文殊が寒山で、普賢が拾得だというのがわからぬと言われたときである。私はとうとう宮崎虎之助さんのことを話した。宮崎さんはメッシアスだと自分で言っていて、またそのメッシアスを拝みに往く人もあるからである。これは現在にある例で説明したら、幾らかわかりやすかろうと思ったからである。

しかしこの説明は功を奏せなかった。子供には昔の寒山が文殊であったのがわからぬと同じく、今の宮崎さんがメッシアスであるのがわからなかった。私は一つの関を躓^こえて、また一つの関に出逢ったように思った。そしてとうとうこう言った。「実はパパアも文殊なのだが、まだ誰も拝みに来ないのだよ」

大正五年一月

寒山拾得

「いや。四大の身を悩ます病は幻でございます。ただ清浄な水がこの受糧器に一ぱいあればよろしい。^{まじない} 咒で直して進めます」

「はあ咒をなさるのか」こう言って少し考えたが「仔細あるまい、一つまじなって下さい」と言った。これは医道のことなどは平生深く考えてもおらぬので、どういう治療ならさせる、どういう治療ならさせぬという定見がないから、ただ自分の悟性に依頼して、その折り折りに判断するのであった。もちろんそういう人だから、かかりつけの医者というのもよく人選をしたわけではなかった。^{そもん れいすう} 素問や靈枢でも読むような医者を捜してきめていたのではなく、近所に住んでいて呼ぶのに面倒のない医者にかかっていたのだから、ろくな薬は飲ませてもらうことが出来なかったのである。今乞食坊主に頼む気になったのは、なんとなくえらそうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ぱいである咒なら間違ったところで危険なこともあるまいと思ったのとのためである。ちょうど東京で高等官連中が^{べにりょうじ} 紅療治や気合術に依頼するのと同じことである。

閻は小女を呼んで、汲みたての水を鉢に入れて来いと命じた。水が来た。僧はそれを受け取って、胸に捧げて、じっと閻を見つめた。清浄な水でもよければ、不潔な水でもいい、湯でも茶^{もっけ}でもいいのである。不潔な水でなかったのは、閻がためには勿怪の幸いであった。しばらく見つめているうちに、閻は覚えぬ精神を僧の捧げている水に集注した。

このとき僧は鉄鉢の水を口にふくんで、突然ふっと閻の頭に吹きかけた。

閻はびっくりして、背中に冷や汗が出た。

「お頭痛は」と僧が問うた。

「あ。^{なお}癒りました」実際閻はこれまで頭痛がする、頭痛がすると気にして、どうしても癒らせずにいた頭痛を、坊主の水に気を取られて、取り逃がしてしまったのである。

僧はしずかに鉢に残った水を床に傾けた。そして「そんならこれでお^{いとま}暇をいたします」と言うや否や、くるりと閻に背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。

「まあ、ちょっと」と閻が呼び留めた。

僧は振り返った。「何かご用で」

「寸志のお礼がいたしたいのですが」

「いや。わたくしは^{ぐんしょう} 群生を福利し、^{きょうまん} 憍慢を^{しゃくぶく} 折伏するために、^{こつじき} 乞食はいたしますが、療治代はいただきませぬ」

「なるほど。それでは強いては申すまい。あなたはどちらのお方か、それを伺っておきたいのですが」

「これまでおったところでございますか。それは天台の国清寺で」

「はあ。天台におられたのですな。お名は」

^{ぶかん} 「豊干と申します」

「天台国清寺の豊干とおっしゃる」閻はしっかりおぼえておこうと努力するように、眉をひそめた。「わたしもこれから台州へ往くものであれば、ことさらお懐かしい。ついでだから伺いたいが、台州には逢いに往つてためになるような、えらい人はおられませんか」

「さようでございます。国清寺に^{じつとく} 拾得と申すものがあります。実は普賢でございます。それから寺の西の方に、^{せきくつ} 寒巖という^{かんざん} 石窟があって、そこに^{もんじゆ} 寒山と申すものがあります。実は文殊でございます

います。さようならお暇^{いとま}をいたします」こう言ってしまって、ついと出て行った。
こういう因縁があるので、閻は天台の国清寺をさして出かけるのである。

全体世の中の人、道とか宗教とかいうものに対する態度に三通りある。自分の職業に気を取られて、ただ^{えきえき}営々^{えきえき}役々と年月を送っている人は、道というものを顧みない。これは読書人でも同じことである。もちろん書を読んで深く考えたら、道に到達せずにはいられまい。しかし^{むとんじゃく}そうまで考えなくても、日々の務めだけは弁じて行かれよう。これは全く無頓着な人である。

つぎに着意して道を求める人がある。専念に道を求めて、万事をなげうつこともあれば、日々の務めは怠らずに、たえず道に志していることもある。儒学に入っても、道教に入っても、仏法^{クリスト}に入っても^{クリスト}基督教に入っても同じことである。こういう人が深くはいり込むと日々の務めがすなわち道そのものになってしまう。つづめて言えばこれは皆道を求める人である。

この無頓着な人と、道を求める人との中間に、道というものの存在を客観的に認めていて、それに対して全く無頓着だというわけでもなく、さればと言ってみずから進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦念め、別に道に親密な人がいるように思って、それを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、単に同じ対象を尊敬する場合を顧慮して言ってみると、道を求める人なら遅れているものが進んでいるものを尊敬することになり、ここに言う中間人物なら、自分のわからぬもの、会得することの出来ぬものを尊敬することになる。そこに盲目^{せいこく}の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、たまたまそれをさし向ける対象が正鵠を得ていても、なんにもならぬのである。

閻は衣服を改め輿^よに乗って、台州の官舎を出た。従者が数十人ある。
時は冬の初めで、霜^{しょうこう}が少し降っている。椒江^{しほうけい}の支流で、始豊溪という川の左岸を迂回しつつ北へ進んで行く。初め^{くも}陰っていた空がようよう晴れて、蒼白^{あおしろ}い日が岸の紅葉^{もみじ}を照している。路^{みち}で出会う老幼は、皆輿^よを避けてひざまずく。輿の中では閻がひどくいい心持ちになっている。牧民の職にいて賢者を礼するというのが、手柄のように思われて、閻に満足を与えるのである。

台州から天台県までは六十里半ほどである。日本の六里半ほどである。ゆるゆる輿^かを昇かせて来たので、県から役人の迎えに出たのに逢ったとき、もう午^{ひる}を過ぎていた。知県の官舎で休んで、馳走^{ちそう}になりつつ聞いてみると、ここから国清寺までは、爪尖^{つまさきあ}上がりの道がまた六十里ある。往き着くまでには夜に入りそうである。そこで閻は知県の官舎に泊ることにした。

翌朝知県に送られて出た。きょうもきのうに変らぬ天気である。一体天台一万八千丈とは、いつ誰が測量したにしても、所詮高過ぎるようだが、とにかく虎のいる山である。道はなかなかきのうのようには^{はかど}抄^{ひるめし}らない。途中で午飯^{ひるめし}を食って、日が西に傾きかかったころ、国清寺の三門に

着いた。智者大師の滅後に、隋の煬帝ずい ようだいが立てたという寺である。

寺でも主簿のご参詣だということで、おろそかにはしない。道翹どうぎょうという僧が出迎えて、閻を客間に案内した。さて茶菓の饗応が済むと、閻が問うた。「当寺に豊干という僧がおられましたか」

道翹が答えた。「豊干とおっしゃいますか。それはさきころまで、本堂の背後うしろの僧院におられましたあんぎゃが、行脚あんぎゃに出られたきり、帰られませぬ」

「当寺ではどういうことをしておられましたか」

「さようでございます。僧どもの食べる米を舂ついておられました」

「はあ。そして何かほかの僧たちと変わったことはなかったのですか」

「いえ。それがございましたので、初めただ骨惜しみをしない、親切な同宿だと存じていました豊干さんを、わたくしどもが大切にいたすようになりました。するとある日ふいと出て行ってしまわれました」

「それはどういうことがあったのですか」

「全く不思議なことでございました。ある日山から虎に騎のって帰って参られたのでございます。そしてそのまま廊下へは行って、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一体詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました」

「はあ。活きた阿羅漢あらかんですな。その僧院の址あとはどうなっていますか」

「只今もあき家になっておりますが、折り折り夜になると、虎が参ほって吼えております」

「そんならご苦労ながら、そこへご案内を願いましょう」こう言って、閻は座を起った。

道翹は蛛くもの網いを払いつつ先に立って、閻を豊干のいたあき家に連れて行った。日がもう暮れかかったので、薄暗い屋内を見廻すに、がらんとして何一つない。道翹は身をかがめて石畳の上の虎の足跡を指さした。たまたま山風が窓の外を吹いて通って、うずたかい庭の落ち葉を捲き上げた。その音せきばくが寂寞あわを破ってざわざわと鳴ると、閻は髪あわの毛の根を締めつけられるように感じて、全身の肌あわに粟あわを生じた。

閻は忙せわしげにあき家を出た。そしてあとからついて来る道翹に言った。「拾得じっとくという僧はまだ当寺におられますか」

道翹は不審らしく閻の顔を見た。「よくご存じでございます。先刻あちらの厨くりやで、寒山と申すものと火に当っておりましたから、ご用がおありなさるなら、呼び寄せましょうか」

「ははあ。寒山も来ておられますか。それは願ってもないことです。どうぞご苦労ついでに厨くりやにご案内を願いましょう」

「承知いたしました」と言って、道翹は本堂について西へ歩いて行く。

閻が背後うしろから問うた。「拾得さんはいつごろから当寺におられますか」

「もうよほど久しいことでございます。あれは豊干さんが松林の中から拾って帰られた捨て子でございます」

「はあ。そして当寺では何をしておられますか」

「拾われて参ってから三年ほど立ちましたとき、食堂じきどうで上座の像に香を上げたり、燈明を上げ

たり、そのほかそな供えものをさせたりいたしましたそうでございます。そのうちある日上座の像に食事を供えておいて、自分が向き合っびんずるそんじゃて一しょに食べているのを見つけれただいまましたそうでございます。賓頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜただいまずにいたしましたことと見えます。唯今では厨で僧どもの食器を洗わせております」

「はあ」と言って、閻は二足三足歩いてから問うた。「それから唯今寒山とおっしゃったが、それはどういう方ですか」

「寒山でございますか。これは当寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んでおりますものでございあらます。拾得が食器を滌あらいますとき、残っている飯や菜を竹の筒に入れて取っておきますと、寒山はそれあらをもらいに参るのでございあらます」

「なるほど」と言って、閻はついて行く。心のうちでは、そんなことをしている寒山、拾得がもんじゅ ふげん の文殊、普賢なら、虎に騎った豊干はなんだろうなどと、田舎者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思惑うもんじゅ ふげん のときのような気分になっているのである。

「はなはだむさくるしい所で」と言いつつ、道翹は閻を厨のうちに連れ込んだ。

ここは湯気が一ぱい籠こもっていて、にわかにはいって見ると、しかと物を見定めることも出来ぬくらいである。その灰色の中に大きいかまど竈が三つあって、どれにも残った薪まきが真赤に燃えている。しばらく立ち止まって見ているうちに、石の壁に沿うて造りつけてある卓つくえの上で大勢の僧が飯や菜や汁を鍋釜なべかまから移しているのが見えて来た。

このとき道翹が奥の方へ向いて、「おい、拾得」と呼びかけた。

閻がその視線をたどって、入口から一番遠い竈の前を見ると、そこに二人の僧のうずくまって火に当たっているのが見えた。

一人は髪むの二三寸伸びた頭を剥き出して、足には草履をはいている。今一人は木の皮で編んだ帽をかぶって、足には木履ぼくりをはいている。どちらも痩せてみすぼらしい小男で、豊干のような大男ではない。

道翹が呼びかけたとき、頭を剥き出した方は振り向いてにやりと笑ったが、返事はしなかった。これが拾得だと見える。帽をかぶった方は身動きもしない。これが寒山なのであろう。

閻はこう見当をつけて二人のそばへ進み寄った。そして袖かを搔き合わせてうやうやしく礼をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋、閻丘胤しひぎょたい きゅういんと申すものでございかます」と名のった。

二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔を見合わせて腹の底からこみ上げて来るような笑い声を出したかと思うと、一しょに立ち上がって、厨を駆け出して逃げた。逃げしなに寒山が「豊干がしゃべったな」と言ったのが聞えた。

驚いてあとを見送っている閻が周囲には、飯や菜や汁を盛っていた僧らが、ぞろぞろと来てたかった。道翹は真蒼まっさおな顔をして立ちすくんでいた。



寒山拾得・寒山拾得縁起

平成二十三年二月十五日 初版

著者 森 鷗外

発行所 藍岩堂